

シンポジウム報告「室町時代源氏絵研究の最前線」

近年の文学研究では、隣接諸学との学際的な研究や世界各地をフィールドとした国際的な研究が積極的に進められている。シンポジウムもそうした流れの中、本学の日本学研究所と恵泉女子大学の稲本万里子氏を研究代表者とする科研プロジェクトが主催し、日本文学専修や日本文学会などが共催するかたちで開催された。当日の開催概要は、以下の通りである。

公開シンポジウム「室町時代源氏絵研究の最前線」

【主催】立教大学日本学研究所、科学研究費補助金基盤研究（B）

「オントロジーに基づく源氏絵データベースを共有・活用した源氏絵の総合研究」（課題番号一七H〇二二九五、研究代表者…稲本万里子）

【共催】立教大学文学部日本文学専修、立教大学大学院文学研究科日本文学専攻、立教大学日本文学会

【日時】二〇一九年十二月十五日（日）一三時半～一八時

【会場】池袋キャンパス太刀川記念館三階カンファレンスルーム
研究発表

「集められた扇絵―九州国立博物館所蔵「扇面画帖」の修理報告―」
驚頭桂（東京国立博物館主任研究員）

「九州国立博物館蔵「扇面画帖」中の源氏絵扇面について―制作年代と筆者の問題を中心に―」

片桐弥生（静岡文化芸術大学教授）

「毛利博物館所蔵「源氏物語絵巻」から見る室町時代源氏絵」

龍澤彩（金城学院大学教授）

「ハーバード大学美術館所蔵「源氏物語画帖」にみる土佐光信の構図と空間表現」
高岸輝（東京大学准教授）

パネルディスカッション

「パネラー」片桐弥生、高岸輝、龍澤彩、驚頭桂

「ディスカッサント」稲本万里子（恵泉女子大学教授）

青木慎一（立教大学兼任講師）

【司会】井野葉子（立教大学教授）

まずは、日本学研究所のホームページや当日のチラシに記された趣旨を再掲する。

一九八九年に個人蔵の「扇面画帖」（現在、九州国立博物館蔵）、一九九三年にハーバード大学美術館の土佐光信筆「源氏物語画帖」が発見されて以来、毛利博物館の「源氏物語絵巻」など、室町時代の源氏絵の発見・紹介が相次ぎ、研究が活性化している。本シンポジウムでは、九州国立博物館にて「扇面画帖」の修理に当たった驚頭桂氏、「扇面画帖」を紹介した片桐弥生氏、毛利博物館の「源氏物語絵巻」を紹介した龍澤彩氏、室町時代土佐派研究の第一人者である高岸輝氏をお招きして、室町時代の源氏絵研究の成果をご発表いただくとともに、今後の展望を語っていただく。

室町時代の源氏絵は現存する作品が少なく、制作年代や場面選

扱の検討にも限度があったが、趣旨にも記される通り、「扇面画帖」や土佐光信筆「源氏物語画帖」の発見は研究が進展する大きな契機となった。中でも、「源氏物語画帖」がハーバード大学美術館の所蔵品であるように、海外調査や在外研究者による紹介も増えており、これまで知られていなかった作品の所在が国内外で相次いで確認されている。そして、近年はカラー図版が出版されたり（毛利博物館蔵「源氏物語絵巻」も該当）、インターネットで画像が公開されたりすることも多く、各作品の絵を自由に参照できる環境が作品の分析や共同研究を深化させる上で大きな役割を果たしてきた。

研究発表では、九州国立博物館蔵「扇面画帖」・ハーバード大学美術館蔵「源氏物語画帖」・毛利博物館蔵「源氏物語絵巻」の様式や画風などの特徴が詳しく紹介された。その後のパネルディスカッションでは、浄土寺蔵「源氏物語図扇面散屏風」や仁和寺蔵「車争図屏風」、今治市河野美術館蔵「源氏物語図屏風」など、室町時代の土佐派の絵師が手がけた作品も交え、光信から光吉へと至る土佐派の図様伝統の継承と変遷を中心に意見が交わされた。

源氏絵研究は、いつ・誰が・何の目的で制作したのかに迫る美術史学と、物語本文や享受史を元に絵の描写の意味や場面選択の意図を探る文学の接点となる領域であり、今後も共同研究や学術交流を通じた成果が見込まれる。作品の発見や美術史学・文学双方の考察が積み重なることにより、パネルディスカッションで話題となったような、図様伝統や絵画化の展開の問題にも新たな知見がもたらされるはずだ。

数は限られるだろうが、室町時代の源氏絵はこの先も新出作品が期待される。他の時代の作品とともに、さらなる調査や解明が成されることを願ってやまない。
(文責・青木慎一)

